

ローマ人への手紙

第一章

一 キリスト・イエスの僕、神の福音の

ために選ばれたれ、召されて使徒となつたパウロから

— この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中

で、あらかじめ約束されたものであつて、三 御子に關す

るものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生

れ、四 聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力

をもつて神の御子と定められた。これがわたしたちの主

イエス・キリストである。五 わたしたちは、その御名の

ために、すべての異邦人を信仰の従順に至らせるように

と、彼によつて恵みと使徒の務とを受けたのであり、

六 あなたがたもまた、彼らの中にあつて、召されてイエス・

キリストに属する者となつたのである——七 ローマにい

る、神に愛され、召された聖徒一同へ。

わたしたちの父なる神および主イエス・キリストから、

恵みと平安とが、あなたがたにあるように。

八 まづ第一に、わたしは、あなたがたの信仰が全世界

に言い伝えられていることを、イエス・キリストによつ

て、あなたがた一同のために、わたしの神に感謝する。

九 わたしは、祈のたびごとに、絶えずあなたがたを覚

え、いつかは御旨になつて道が開かれ、どうにかして、

あなたがたの所に行けるようにと願っている。このこと

について、わたしのためにあかしをして下さるのは、わ

たしが霊により、御子の福音を宣べ伝えて仕えている神

である。二 わたしは、あなたがたに会うことを熱望して

いる。あなたがたに霊の賜物を幾分でも分け与えて、力

づけたいからである。三 それは、あなたがたの中にいて、

あなたがたとわたしとの相互の信仰によつて、共に励ま

し合うためにほかならない。四 兄弟たちよ。このことを

知らずにいてもいたくない。わたしはほかの異邦人の

間で得たように、あなたがたの間でも幾分かの実を得る

ために、あなたがたの所に行こうとしばしば企てたが、

今まで妨げられてきた。五 わたしには、ギリシヤ人にも

未開の人にも、賢い者にも無知な者にも、果すべき責任

がある。六 そこで、わたしとしての切なる願いは、ロー

マにいるあなたがたにも、福音を宣べ伝えることなので

ある。七 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人

をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得

させる神の力である。八 神の義は、その福音の中に啓示

され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰によ

る義人は生きる」と書いてあるとおりである。

九 神の怒りは、不義をもつて真理をはばもうとする人

間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示され

る。一〇 なぜなら、神について知りうる事からは、彼らに

は明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたので

ある。三〇神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造のかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。三なぜなら、彼らは神を知っているが、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。三彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、三不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。

三四ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられた。三五彼らは神の真理を変えて虚偽とし、創造者の代りに被造物を拜み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にはむべきものである、アアメン。

三六それゆえ、神は彼らを恥すべき情欲に任せられた。すなわち、彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代え、三七男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥すべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである。

三八そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかった。たので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。三九すなわち、彼らは、あらゆる不義と悪と貪欲と悪意とにあふれ、ねたみと殺

意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言する者、三〇そして、神を憎む者、不遜な者、傲慢な者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり、三無知、不誠実、無情、無慈悲な者となっている。三彼らは、こうした事を行う者どもが死に価するという神の定めをよく知りながら、自らそれを行うばかりではなく、それを行う者どもを是認さえしている。

第二章 一だから、ああ、すべて人をさばく者

よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによつて、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。二わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正しく下ることを、知っている。三ああ、このような事を行う者どもをさばきながら、しかも自ら同じことを行う人よ。あなたは、神のさばきをのがれうと思うのか。四それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。五あなたのかたくなな、悔改めのない心のゆえに、あなたは、神の正しいさばきの現れる怒りの日のために、神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。六神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。七すなわち、一方では、耐え忍んで善を行つて、光栄とほまれと朽ちぬものを求める人に、永遠のいのちが与えられ、他方では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に

従う人に、怒りと激しい憤りとが加えられる。九 悪を行
うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、
患難と苦悩とが与えられ、一〇 善を行うすべての人には、
ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、光栄とほまれと平安
とが与えられる。二 なぜなら、神には、かたより見るこ
とがないからである。

三 そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法
なしに滅び、律法のもとで罪を犯した者は、律法によっ
てさばかれる。三 なぜなら、律法を聞く者が、神の前に
義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるから
である。四 すなわち、律法を持たない異邦人が、自然の
まま、律法の命じる事を行なうなら、たとひ律法を持た
なくても、彼らにとつては自分自身が律法なのである。
五 彼らは律法の要求がその心にしるされていることを現
し、そのことを彼らの良心も共にあかしをして、その判
断が互にあるいは訴え、あるいは弁明し合うのである。
六 そして、これらのことは、わたしの福音によれば、神
がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらをさば
かれるその日に、明らかにされるであらう。

七 もしあなたが、自らユダヤ人と称し、律法に安んじ、
神を誇とし、一八 御旨を知り、律法に教えられて、なすべ
きことをわきまえており、一九二〇 さらに、知識と真理とが
律法の中に形をとっているとして、自ら盲人の手引き、
やみにおる者の光、愚かな者の導き手、幼な子の教師を

もって任じているのなら、三 なぜ、人を教えて自分を教
えないのか。盗むなど人に説いて、自らは盗むのか。
三 姦淫するなど言いつて、自らは姦淫するのか。偶像を忌
みきらひながら、自らは宮の物をかすめるのか。三 律法
を誇としながら、自らは律法に違反して、神を侮ってい
るのか。二四 聖書に書いてあるとおり、「神の御名は、あな
たがたのゆえに、異邦人の間で汚されている」。二五 もし、
あなたが律法を行なうなら、なるほど、割礼は役に立つ。
しかし、もし律法を犯すなら、あなたの割礼は無割礼と
なってしまう。二六 だから、もし無割礼の者が律法の規定
を守るなら、その無割礼は割礼と見なされるではない
か。二七 かつ、生れながら無割礼の者であつて律法を全う
する者は、律法の文字と割礼とを持ちながら律法を犯し
ているあなたを、さばくのである。二八 というのは、外見
上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上の肉に
おける割礼が割礼でもない。二九 かえつて、隠れたユダヤ
人がユダヤ人であり、また、文字によらず霊による心の
割礼こそ割礼であつて、そのほまれは人からではなく、
神から来るのである。

第三 三 章 一 では、ユダヤ人のすぐれている点は何
か。また割礼の益は何か。二 それは、いろいろの点で
数多くある。まず第一に、神の言が彼らにゆだねられた
ことである。三 すると、どうなるのか。もし、彼らのう
ちに不真実の者があつたとしたら、その不真実によって、

神の眞実は無になるであらうか。断じてそうではない。あらゆる人を偽り者としても、神を眞実なものとするべきである。それは、

「あなたが言葉を述べるときは、義とせられ、あなたがさばきを受けるとき、勝利を得るため」と書いてあるとおりである。

しかし、もしわたしたちの不義が、神の義を明らかにするとしたら、なんと言うべきか。怒りを下す神は、不義であると言うのか（これは人間的な言い方ではある）。断じてそうではない。もしそうであつたら、神はこの世を、どうさばかれるだろうか。しかし、もし神の眞実が、わたしの偽りによりいつそう明らかにされて、神の栄光となるなら、どうして、わたしはなおも罪人としてさばかれるのだろうか。むしろ、「善をきたらせるために、わたしたちは悪をしようではないか」（わたしたちがそう言っていると、ある人々はそしっている）。彼らが罰せられるのは当然である。

すると、どうなるのか。わたしたちには何かまさつたところがあるのか。絶対にない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく罪の下にあることを、わたしたちはすでに指摘した。次のように書いてある、

「義人はいない、ひとりもない。」

二 悟りのある人はいない、神を求める人はいない。

三 すべての人は迷ひ出て、ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもない。

三 彼らのどは、開いた墓であり、彼らは、その舌で人を欺き、

彼らのくちびるには、まむしの毒があり、

彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。

五 彼らの足は、血を流すのに速く、

六 彼らの道には、破壊と悲惨とがある。

七 そして、彼らは平和の道を知らない。

八 彼らの目の前には、神に対する恐れがない。

九 さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法のもとにある者たちに対して語られている。それは、すべての口がふさがれ、全世界が神のさばきに服するためである。なぜなら、律法を行うことによつては、すべての人間は神の前に義とせられないからである。律法によつては、罪の自覚が生じるのみである。

三 しかし今や、神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者によつてあかしされて、現された。三 それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、すべて信じる人に与えられるものである。そこにはなんらの差別もない。三 すなわち、すべての人は罪を犯した

ため、神の栄光を受けられなくなっており、^{二四}彼らは、
 働なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあ
 がないによって義とされるのである。^{二五}神はこのキリス
 トを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあが
 ないの供え物とされた。それは神の義を示すためであつ
 た。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもつ
 て見のがしておられたが、^{二六}それは、今の時に、神の義
 を示すためであつた。こうして、神みずからが義となり、
 さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。^{二七}す
 ると、どこにわたしたちの誇があるのか。全くない。な
 んの法則によってか。行いの法則によってか。そうでは
 なく、信仰の法則によってである。^{二八}わたしたちは、こ
 う思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのでは
 なく、信仰によるのである。^{二九}それとも、神はユダヤ人
 だけの神であらうか。また、異邦人の神であるのではな
 いか。確かに、異邦人の神でもある。^{三〇}まことに、神は
 唯一であつて、割礼のある者を信仰によって義とし、ま
 た、無割礼の者をも信仰のゆえに義とされるのである。
^{三一}すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にす
 るのであるか。断じてそうではない。かえって、それに
 よつて律法を確立するのである。

第四章

「それでは、肉によるわたしたちの先
 祖アブラハムの場合については、なんと言つたらよいか。
^二もしアブラハムが、その行いによって義とされたので

あれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえ
 では、できない。^三なぜなら、聖書はなんと言つてい
 るか、「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と
 認められた」とある。^四いったい、働く人に対する報酬
 は、恩恵としてではなく、当然の支払ひとして認められ
 る。^五しかし、働きはなくても、不信心な者を義とする
 かたを信じる人は、その信仰が義と認められるのであ
 る。^六ダビデもまた、行いがなくても神に義と認められ
 た人の幸福について、次のように言っている、
 「セ、不法をゆるされ、罪をおおわれた人たちは、
 さいわいである。
 「罪を主に認められない人は、さいわいである」。
^九さて、この幸福は、割礼の者だけが受けるのか。そ
 れとも、無割礼の者にも及ぶのか。わたしたちは言う、
 「アブラハムには、その信仰が義と認められた」のであ
 る。^{一〇}それでは、どうする場合にそう認められたのか。
 割礼を受けてからか、それとも受ける前か。割礼を受け
 てからではなく、無割礼の時であつた。^{一一}そして、アブ
 ラハムは割礼というしるしを受けたが、それは、無割礼
 のままで信仰によって受けた義の証印であつて、^{一二}彼が、
 無割礼のままで信じて義とされるに至るすべての人の父
 となり、^{一三}かつ、割礼の者の父となるためなのである。
 割礼の者というのは、割礼を受けた者ばかりではなく、
 われらの父アブラハムが無割礼の時に持っていた信仰の

足跡を踏む人々をもさすのである。三なぜなら、世界を相續させるとの約束が、アブラハムとその子孫とに對してなされたのは、律法によるのではなく、信仰の義によるからである。四もし、律法に立つ人々が相續人であるとすれば、信仰はむなしくなり、約束もまた無効になつてしまふ。五いつたい、律法は怒りを招くものであつて、律法のないところには違反なるものはない。六このようになわけで、すべては信仰によるのである。それは恵みによるのであつて、すべての子孫に、すなわち、律法に立つ者だけにではなく、アブラハムの信仰に従う者にも、この約束が保証されるのである。アブラハムは、神の前で、わたしたちすべての者の父であつて、一七わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした」と書いてあるとおりである。彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。一八彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、「あなたの子孫はこうなるであらう」と言われているとおり、多くの国民の父となつたのである。一九すなわち、およそ百歳となつて、彼自身のからだが生んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であるのを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかつた。二〇彼は、神の約束を不信仰のゆゑに疑うようなことはせず、かえつて信仰によつて強められ、栄光を神に歸し、三神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。三三だから、彼は義

と認められたのである。三三しかし「義と認められた」と書いてあるのは、アブラハムのためだけではなく、二四わたしたちのためでもあつて、わたしたちの主イエスを死んだ人の中からよみがえらせたかたを信じるわたしたちも、義と認められるのである。二五主は、わたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされたのである。

第五章 このように、わたしたちは、信仰によつて義とされたのだから、わたしたちの主イエス、

キリストにより、神に對して平和を得ている。二六わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によつて導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもつて喜んでゐる。二七それだけではなく、患難をも喜んでゐる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は鍊達を生み出し、鍊達は希望を生み出すことを、知っているからである。二八そして、希望は失望に終ることとはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖靈によつて、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。二九わたしたちがまだ弱かつたころ、キリストはある。三〇わたしたちがまだ弱かつたころ、キリストは、時いたつて、不信心な者たちのために死んで下さつたのである。三一正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであらう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであらう。ハしかし、まだ罪人であつた時、わたしたちのためにキリストが死んで下さつたことによつて、神

はわたしたちに対する愛を示されたのである。わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。二そればかりではなく、わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。

三このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。三というのは、律法以前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪として認められないのである。四しかし、アダムからモーセまでの間においても、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者も、死の支配を免れなかった。このアダムは、きたるべき者の型である。五しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりのイエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。六かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果とは異なっている。なぜなら、さばきの場合は、ひとりの罪過

から、罪に定めることになったが、恵みの場合には、多くの人の罪過から、義とする結果になるからである。七もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおり、いのちにあつて、さらに力強く支配するはずではないか。八このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。九すなわち、ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人が義人とされるのである。一〇律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。二それは、罪が死によって支配するに至ったように、恵みもまた義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより、永遠のいのちを得させるためである。

第六章 一では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであるうか。二断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。三それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼

の死にあずかるバプテスマを受けたのである。四すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。五もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう。六わたしたちは、この事を知っている。わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは、この罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである。七それは、すでに死んだ者は、罪から解放されているからである。八もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら、また彼と共に生きることを信じる。九キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。一〇なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きているのは、神に生きるのだからである。二このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認むべきである。二三だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わせることをせず、二四また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、

死人の中から生かされた者として、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。二五なぜなら、あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるので、罪に支配されることはないからである。

二五それでは、どうなのか。律法の下ではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきであらうか。断じてそうではない。二六あなたがたは知らないのである。あなたがた自身も、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であつて、死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである。二七しかし、神は感謝すべきかな。あなたがたは罪の僕であつたが、伝えられた教の基準に心から服従して、二八罪から解放され、義の僕となつた。二九わたしは人間的な言い方をするが、それは、あなたがたの肉の弱さのゆえである。あなたがたは、かつて自分の肢体を汚れと不法との僕としてささげて不法に陥つたように、今や自分の肢体を義の僕としてささげ、きよくならねばならない。三〇あなたがたが罪の僕であつた時は、義とは縁のない者であつた。三二その時あなたがたは、どんな実を結んだのか。それは、今では恥とするようなものであつた。それらのものの終極は、死である。三三しかし今や、あなたがたは罪から解放されて神に仕え、きよきに至る実を結んでいる。その終極は永遠のい

のちである。三罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。

第七章

「それとも、兄弟たちよ。あなたがたは知らないのか。わたしは律法を知っている人々に語るのであるが、律法は人をその生きている期間だけ支配するものである。二すなわち、夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって彼につながれている。しかし、夫が死ねば、夫の律法から解放される。三であるから、夫の生存中に他の男に行けば、その女は淫婦と呼ばれるが、もし夫が死ねば、その律法から解かれるので、他の男に行っても、淫婦とはならない。四わたしの兄弟たちよ。このように、あなたがたも、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち、死人の中からよみがえられたかたのものとなり、こうして、わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのである。五というのは、わたしたちが肉にあった時には、律法による罪の欲情が、死のために実を結ばせようとして、わたしたちの肢体のうちに働いていた。六しかし今は、わたしたちをつないでいたものに對して死んだので、わたしたちは律法から解放され、その結果、古い文字によってではなく、新しい霊によって仕えているのである。

七それでは、わたしたちは、なんと言おうか。律法は

罪なのか。断じてそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったであろう。すなわち、もし律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしはむさぼりなるものを知らなかったであろう。ハしかるに、罪は戒めによって機会を捕え、わたしの内に働いて、あらゆるむさぼりを起させた。すなわち、律法がなかったら、罪は死んでいるのである。九わたしはかつては、律法なしに生きていたが、戒めが来るに及んで、罪は生き返り、一わたしは死んだ。そして、いのちに導くべき戒めそのものが、かえってわたしを死に導いて行くことがわかった。二なぜなら、罪は戒めによって機会を捕え、わたしを欺き、戒めによってわたしを殺したからである。三このようなわけで、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである。四では、善なるものが、わたしにとって死となったのか。断じてそうではない。それはむしろ、罪の罪たることが現れるための、罪のしわざである。すなわち、罪は、戒めによって、はなはだしく悪性なものとなるために、善なるものによってわたしを死に至らせたのである。五わたしたちは、律法は靈的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。六わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。

「六」もし、自分の欲しない事をしていゝとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認してゐることにならう。『七』そこで、この事をしてゐるのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿つてゐる罪である。『八』わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿つてゐないことを、わたしは知つてゐる。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。『九』すなわち、わたしの欲してゐる善はしないので、欲してゐない悪は、これを行つてゐる。『一〇』もし、欲しないことをしてゐるとすれば、それをしてゐるのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿つてゐる罪である。『一〇』そこで、善をしようとするわたしに、悪がはいり込んでゐるという法則があるのを見る。『一三』すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでゐるが、『一四』わたしの肢体には別の律法があつて、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。『一五』わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救つてくれるだろうか。『一六』わたしたちの主イエス・キリストによつて、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えてゐるが、肉では罪の律法に仕えてゐるのである。

第八章 「こういうわけで、今やキリスト・イエ

スにある者は罪に定められることがない。『一七』なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。『一八』律法が肉により無力になつてゐるためになし得なかつた事を、神はなし遂げて下さつた。すなわち、御子を、罪の肉の樣で罪のためにつかわれ、肉において罪を罰せられたのである。『一九』これは律法の要求が、肉によらず霊によつて歩くわたしたちにおいて、満たされるためである。『二〇』なぜなら、肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思うからである。『二一』肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。『二二』なぜなら、肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従はず、否、従ひ得ないのである。『二三』また、肉にある者は、神を喜ばせることができない。『二四』しかし、神の御霊があなたがたの内に宿つてゐるなら、あなたがたは肉におるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がゐるなら、その人はキリストのものである。『二五』もし、キリストがあなたがたの内に宿つてゐるなら、あなたがたは肉に生きているのである。『二六』もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿つてゐるなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿つてゐる御霊によつて、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるで

あろう。二それゆえに、兄弟たちよ。わたしたちは、果すべき

責任を負っている者であるが、肉に従って生きる責任を

肉に対して負っているのではない。三なぜなら、もし、

肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬ外はないから

である。しかし、霊によつてからだの働きを殺すなら、

あなたがたは生きるであらう。四すべて神の御霊に導か

れている者は、すなわち、神の子である。五あなたがた

は再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、

子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によつ

て、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。六御

霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の

子であることをあかしして下さる。七もし子であれば、

相續人でもある。神の相續人であつて、キリストと栄光

と共にするために苦難をも共にしている以上、キリスト

と共同の相續人なのである。

八わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわた

したちに現されようとする栄光に比べると、言うに足り

ない。九被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出

現を待ち望んでいる。十なぜなら、被造物が虚無に服し

たのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかた

によるのであり、三かつ、被造物自身にも、滅びのなわ

めから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望み

が残されているからである。三三実に、被造物全体が、今

に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている

ことを、わたしたちは知っている。三三それだけではなく、

御霊の最初の実を持つているわたし自身も、心の内

でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわ

ち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる。二四わ

たしたちは、この望みによつて救われているのである。

しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現

に見ている事を、どうして、なお望む人があるうか。

二五もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたし

ちは忍耐して、それを待ち望むのである。

二六御霊もまた同じように、弱いわたしを助けて下

さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらいかわか

らないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるう

めきをもつて、わたしたちのためにとりなして下さるか

らである。二七そして、人の心を探り知るかたは、御霊の

思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、

御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをし

て下さるからである。二八神は、神を愛する者たち、すな

わち、ご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万

事を益となるようにして下さることを、わたしたちは

知っている。二九神はあらかじめ知っておられる者たちを、

更に御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ

定めて下さった。それは、御子を多くの兄弟の中で長

子とならせるためであった。三〇そして、あらかじめ定め

た者たちを更に召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えて下さったのである。

三 それでは、これらの事について、なんと言おうか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。三 ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか。三 だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。三 だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。三 だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。三 「わたしたちはあなたのために終日、死に定められており、患難の雲と憂いの霧に覆われ、ほふられる羊のように見られている」三 と書いてあるとおりである。三 しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。三 わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、三 高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない

のである。

第九章

「わたしはキリストにあつて眞実を語る。偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって、わたしにこうあかしをしている。三 すなわち、わたしに大きな悲しみがあり、わたしの心に絶えざる痛みがある。三 実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。四 彼らはイスラエル人であつて、子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼らのもの、五 また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にいます神は、永遠にほむべきかな、アアメン。六 しかし、神の言が無効になったというわけではない。なぜなら、イスラエルから出た者が全部イスラエル人ではなく、七 また、アブラハムの子孫だからといって、その全部が子であるのではないからである。かえって「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」。八 すなわち、肉の子がそのまま神の子なのではなく、むしろ約束の子が子孫として認められるのである。九 約束の言葉はこうである。「来年の今ごろ、わたしはまた来る。そして、サラに男子が与えられるであろう」。一〇 そればかりではなく、ひとりの人、すなわち、わたしたちの父祖イサクによって受胎したりベカの場合も、ま

た同様である。二まだ子供らが生れもせず、善も悪もしない先に、神の選びの計画が、三わざによらず、召したかたによって行われるために、「兄は弟に仕えるであろう」と、彼女に仰せられたのである。四「わたしはヤコブを愛しエサウを憎んだ」と書いてあるとおりである。五では、わたしたちはなんと言おうか。神の側に不正があるのか。断じてそうではない。六神はモーセに言われた、「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつくしむ」。七ゆえに、それは人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによるのである。八聖書はバロにこう言っている、「わたしがあなたを立てたのは、この事のためである。すなわち、あなたによってわたしの力をあらわし、またわたしの名が全世界に言いひろめられるためである」。九だから、神はそのあわれもうと思う者をあわれみ、かたくなにしようと思う者を、かたくなになさるのである。一〇そこで、あなたは言うであろう、「なぜ神は、なおも人を責められるのか。だが、神の意図に逆らい得ようか」。一一ああ人よ。あなたは、神に言い逆らうとは、いったい、何者なのか。造られたものが造った者に向かつて、「なぜ、わたしをこのように造ったのか」と言うことがあろうか。一二陶器を造る者は、同じ土くれから、一つを尊い器に、他を卑しい器に造りあげる権能がないのである。一三もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力

を知らせようと思われつつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ばれたとすれば、一四かつ、栄光にあずからせるために、あらかじめ用意されたあわれみの器にご自身の栄光の富を知らせようとされたとすれば、どうであろうか。一五神は、このあわれみの器として、またわたしたちをも、ユダヤ人の中からだけではなく、異邦人の中からも召されたのである。一六それは、ホセアの手紙でも言われているとおりである、一七「わたしは、わたしの民でない者を、一八わたしを愛する民と呼び、一九わたしを愛さなかった者を、愛される者と呼ぶであろう。二〇あなたがたはわたしの民ではないと、二一彼らに言ったその場所で、二二彼らは生ける神の子らであると、二三呼ばれるであろう」。二四また、イザヤはイスラエルの子らについて叫んでいる、二五「たとい、イスラエルの子らの数は、二六浜の砂のようであっても、二七救われるのは、残された者だけであろう。二八主は、御言をきびしくまたすみやかに、二九地上になしとげられるであろう」。三〇さらに、イザヤは預言した、三一「もし、万軍の主がわたしたちに三二子孫を残されなかったなら、三三」

わたしたちはソドムのようになり、
ゴモラと同じようになったであろう」。

三〇では、わたしたちはなんと言おうか。義を追い求めなかった異邦人は、義、すなわち、信仰による義を得た。三十一かし、義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。三十二なぜであるか。信仰によらないで、行いによって得られるかのように、追い求めたからである。彼らは、つまずきの石につまづいたのである。

三十三「見よ、わたしはシオンに、

つまずきの石、さまたげの岩を置く。

それにより頼む者は、失望に終ることがない」と書いてあるとおりである。

第一〇章 一兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼

らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。二わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。三なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。四キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。

五モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。六しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るのであるかと言いな」。それは、キリストを引き降ろすこ

とである。七また、「だれが底知れぬ所に下るのであるかと言いな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。八では、なんと言っているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えていく信仰の言葉である。

九すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。一〇なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。二聖書は、「すべて彼を信じる者は、失望に終ることがない」と言っている。三ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。三なぜなら、「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」とあるからである。

四しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。五つかかわされなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。六ああ、麗しいかな、良きおとずれを告げる者の足は」と書いてあるとおりである。七しかし、すべての人が福音に聞き従ったのではない。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っている。八したがって、信仰は

聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。「しかしわたしは言う、彼らには聞えなかったであろうか。否、むしろ」

「その声は全地にひびきわたり、その言葉は世界のはてにまで及んだ」。九なお、わたしは言う、イスラエルは知らなかったであろうか。まずモーセは言っている、

「わたしはあなたがたに、国民でない者に対してねたみを起させ、無知な国民に対して、怒りをいだかせるであろう」。

「わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した」。

三そして、イスラエルについては、「わたしは服従せず反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた」と言っている。

第一章「そこで、わたしは問う、「神はその民を捨てたのであろうか」。断じてそうではない。わたしもイスラエル人であり、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の者である。二神は、あらかじめ知っておられたその民を、捨てることはされなかった。聖書がエリヤについてなんと言っているか、あなたがたは知らないのか。す

なわち、彼はイスラエルを神に訴えてこう言った。

「主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこぼち、そして、わたしひとりを取り残されたのに、彼らはわたしのいのちをも求めています」。

「しかし、彼らに対する御告げはなんであつたか、「バアルにひざをかがめなかった七千人を、わたしのために残しておいた」。

五それと同じように、今の時にも、恵みの選びによって残された者がいる。六しかし、恵みによるのであれば、もはや行いによるのではない。そうでないと、恵みは

もはや恵みでなくなるからである。七では、どうなるのか。イスラエルはその追ひ求めてゐるものを得ないで、ただ選ばれた者が、それを得た。そして、他の者たちはかたくなになった。

八「神は、彼らに鈍い心と、見えない目と、聞えない耳とを与えて、言ふことのできやう、この日に及んでいる」

と書いてあるとおりである。九ダビデもまた言っている、「彼らの食卓は、彼らのわなとなれ、網となれ、こ

つまずきとなれ、報復となれ。二彼らの目は、くらんで見えなくなれ、彼らの背は、いつまでも曲つておれ」。

三そこで、わたしは問う、「彼らがつまずいたのは、倒れるためであつたのか」。断じてそうではない。かえつて、彼らの罪過によって、救が異邦人に及び、それに

よつてイスラエルを奮起させるためである。^二しかし、もし、彼らの罪過が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となったとすれば、まして彼らが全部救われたなら、どんなにかすばらしいことであろう。

^三そこでわたしは、あなたがた異邦人に言う。わたし自身は異邦人の使徒なのであるから、わたしの務を光榮とし、^四どうにかしてわたしの骨肉を奮起させ、彼らの幾人かを救おうと願っている。^五もし彼らの捨てられたことが世の和解となったとすれば、彼らの受け入れられることは、死人の中から生き返ることではないか。^六もし、麦粉の初穂がきよければ、そのかたまりもきよい。もし根がきよければ、その枝もきよい。^七しかし、もしある枝が切り去られて、野生のオリブであるあなたがそれにつがれ、オリブの根の豊かな養分にあずかっているとすれば、^八あなたはその枝に対して誇つてはならない。たとえ誇るとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのである。^九すると、あなたは、「枝が切り去られたのは、わたしがつがれるためであつた」と言うであろう。^{一〇}まさに、そのとおりである。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶつた思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。^{一一}もし神が元木の枝を惜しまなかつたとすれば、あなたを惜しむようなことはないのである。^{一二}神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒

れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがたその慈愛にとどまつてゐるなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう。^{一三}しかし彼らも、不信仰を続けなければ、つがれるであろう。神には彼らを再びつぐ力がある。^{一四}なぜなら、もしあなたが自然のままの野生のオリブから切り取られ、自然の性質に反して良いオリブにつがれたとすれば、まして、これら自然のままの良い枝は、もつとたやすく、元のオリブにつがれないであろうか。

^{一五}兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになつたのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことであつて、^{一六}こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある、

「救う者がシオンからきて、

ヤコブから不信心を追い払うであろう。」

^{一七}そして、これが、彼らの罪を除き去る時に、

彼らに対して立てるわたしの契約である。」

^{一八}福音について言えば、彼らは、あなたがたのゆえに、神の敵とされているが、選びについて言えば、父祖たちのゆえに、神に愛せられる者である。^{一九}神の賜物と召し

とは、変えられることがない。^{二〇}あなたがたが、かつては神に不従順であつたが、今は彼らの不従順によつてあ

われみを受けたように、^三彼らも今は不従順になつてゐるが、それは、あなたがたの受けたあわれみによつて、彼ら自身も今あわれみを受けるためなのである。^{三三}すなわち、神はすべての人をあわれむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込めたのである。
^{三四}ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがなく、その道は測りがたい。
^{三五}だれが、主の心を知つていたか。
^{三六}また、だれが、主の計画にあづかつたか。
^{三七}その報いを受けるであらうか。
^{三八}万物は、神からいで、神によつて成り、神に帰するものである。栄光がとこしえに神にあるように、アアメン。
第一二章 一兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによつてあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてさげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。^二あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによつて、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であつて、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。
^三わたしは、自分に与えられた恵みによつて、あなたがたひとりびとりに言う。思うべき限度を越えて思いあがることなく、むしろ、神が各自に分け与えられた信仰

の量りにしたがつて、慎み深く思うべきである。^四なぜなら、一つのからだにたくさんの肢体があるが、それらの肢体がみな同じ働きをしてはいないように、^五わたしたちも数は多いが、キリストにあつて一つのからだであり、また各自は互に肢体だからである。^六このように、わたしたちは与えられた恵みによつて、それぞれ異なつた賜物を持つてゐるので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、^七奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、^八勧めをする者であれば勧め、^九寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、^{一〇}慈善をする者は快く慈善をすべきである。^{一一}愛には偽りがあつてはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、^{一二}兄弟の愛をもつて互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。^{一三}熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、^{一四}望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。^{一五}貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。^{一六}あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろつてはならない。^{一七}喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。^{一八}互に思うことをひとつにし、高ぶつた思いをいだかず、かえつて低い者たちと交わるがよい。自分が知者だと思ひあがつてはならない。^{一九}だれに対しても悪をもつて悪に報いず、すべての人に対して善を圖りなさい。^{二〇}あなたがたは、できる限りすべての人と平和に過ごしなさい。^{二一}愛する者たち

よ。自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、「主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する」と書いてあるからである。二〇むしろ、「もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることに よって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである」。三 惡に負けてはいけない。かえって、善をもって惡に勝ちなさい。

第一三章 一 すべての人は、上に立つ權威に従うべきである。なぜなら、神によらない權威はなく、おおよそ存在している權威は、すべて神によって立てられたものだからである。二 したがって、權威に逆らう者は、神の定めにそむく者である。そむく者は、自分の身にさばきを招くことになる。三 いったい、支配者たちは、善事をする者には恐怖でなく、惡事をする者にこそ恐怖である。あなたは權威を恐れないことを願うのか。それでは、善事をするがよい。そうすれば、彼からほめられるであろう。四 彼は、あなたに益を与えるための神の僕なのである。しかし、もしあなたが惡事をすれば、恐れなければならぬ。彼はいたずらに剣を帯びているのではない。彼は神の僕であって、惡事を行う者に対しては、怒りをもって報いるからである。五 だから、ただ怒りをのがれるためではなく、良心のためにも従うべきである。六 あなたがたが貢を納めるのも、また同じ理由か

らである。彼らは神に仕える者として、もっぱらこの務に携わっているのである。七 あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果しなさい。すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納め、恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬いなさい。

八 互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあつてはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。九 姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」など、そのほかに、どんな戒めがあつても、結局「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」というこの言葉に帰する。一〇 愛は隣り人に害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。

二 なお、あなたがたは時を知っているのだから、特に、この事を励まねばならない。すなわち、あなたがたの眠りからさめるべき時が、すでにきている。なぜなら今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。三 夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武器を着けようではないか。四 そして、宴樂と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つつましく歩こうではないか。五 あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。

第一四章 一 信仰の弱い者を受けいれなさい。た

だ、意見を批評するためであつてはならない。二ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。三食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受け入れて下さったのであるから。四他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立てることができ、彼は立つようになる。五また、ある人は、この日がかの日より大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである。六日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。そして、神に感謝する。七すなわち、わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。八わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。九なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるために、死んで生き返られたからである。一〇それなのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。二すなわち、

「主が言われる。わたしは生きています。」

すべてのひざは、わたしに対してかがみ、

すべての舌は、神にさんびをささげるであろう」

と書いてある。三だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。

四それゆえ、今後わたしたちは、互にさばき合うことをやめよう。むしろ、あなたがたは、妨げとなる物や、つまずきとなる物を兄弟の前に置かないことに、決めるがよい。五わたしは、主イエスにあって知りかつ確信している。それ自体、汚れているものは一つもない。ただ、それが汚れていると考える人にだけ、汚れているのである。六もし食物のゆえに兄弟を苦しめるなら、あなたは、もはや愛によって歩いているのではない。あなたの食物によって、兄弟を滅ぼしてはならない。キリストは彼のために、死なれたのである。七それだから、あなたがたにとって良い事が、そしりの種にならぬようにしなさい。八神の国は飲食ではなく、義と、平和と、聖霊における喜びとである。九こうしてキリストに仕える者は、神に喜ばれ、かつ、人にも受け入れられるのである。一〇こういうわけで、平和に役立つことや、互の徳を高めることを、追い求めようではないか。一一食物のことで、神のみわざを破壊してはならない。すべての物はきよい。ただ、それを食べて人をつまずかせる者には、悪となる。一二肉を食わず、酒を飲まず、そのほか兄弟をつま

ずかせないのは、良いことである。三 あなたの持つてい
る信仰を、神のみまえに、自分自身に持つていなさい。
自ら良いと定めたことについて、やましいと思わない人
は、さいわいである。三 しかし、疑いながら食べる者は、
信仰によらないから、罪に定められる。すべて信仰によ
らないことは、罪である。

第一 五章 「わたしは強い者は、強くない者た
ちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせるこ
とをしてはならない。二 わたしたちひとりびとりは、隣
り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばす
べきである。三 キリストさえ、ご自身を喜ばせることは
なさらなかった。むしろ「あなたをそしめる者のそしりが、
わたしに降りかかった」と書いてあるとおりであった。
四 これまでに書かれた事がらは、すべてわたしたちの教
のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐
と慰めとによって、望みをいだかせるためである。五 ど
うか、忍耐と慰めとの神が、あなたがたに、キリスト・
イエスにならって互に同じ思いをいだかせ、六 こうして、
心を一つにし、声を合わせて、わたしたちの主イエス・
キリストの父なる神をあがめさせて下さるように。

七 こういうわけで、キリストもわたしたちを受けいれ
て下さったように、あなたがたも互に受けいれて、神の
栄光をあらわすべきである。八 わたしは言う、キリスト
は神の真実を明らかにするために、割礼のある者の僕と
なられた。それは父祖たちの受けた約束を保証すると共
に、九 異邦人もあわれみを受けて神をあがめるようにな
るためである。
「それゆえ、わたしは、異邦人の中で
あなたにさんびをささげ、
また、御名をほめ歌う」
と書いてあるとおりである。
「また、こう言っている、
「異邦人よ、主の民と共に喜べ」。
二 また、
「すべての異邦人よ、主をほめまつれ。
もろもろの民よ、主をほめたたえよ」。
三 またイザヤは言っている、
「エッサイの根から芽が出て、
異邦人を治めるために立ち上がる者が来る。
異邦人は彼に望みをおくであろう」。
四 どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平
安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あな
たがたを、望みにあふれさせて下さるように。
「四 さて、わたしの兄弟たちよ。あなたがた自身が、善
意にあふれ、あらゆる知恵に満たされ、そして互に訓戒
し合う力のあることを、わたしは強く信じている。二五 し
かし、わたしはあなたがたの記憶を新たにするために、
ところどころ、かなり思いきって書いた。それは、神か

らわたしに賜わった恵みによって、書いたのである。

二六 このように恵みを受けたのは、わたしが異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を勤め、こうして異邦人を、聖霊によってきよめられた、御旨にかなうささげ物とするためである。

二七 だから、わたしは神への奉仕については、キリスト・イエスにあつて誇りうるのである。二八 わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、一九しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働かせて下さったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない。こうして、わたしはエルサレムから始まり、巡りめぐつてイルリコに至るまで、キリストの福音を満たしてきた。三〇 その際、わたしの切に望んだところは、他人の土台の上に建てることをしないで、キリストの御名がまだ唱えられていない所に福音を宣べ伝えることであつた。三すなわち、

「彼のことを宣べ伝えられていなかった人々が見、聞いていかなかった人々が悟るであらう」

と書いてあるとおりである。

三三 こういうわけで、わたしはあなたがたの所に行くことを、たびたび妨げられてきた。三三 しかし今では、この地方にはもはや働く余地がなく、かつイスパニヤに赴く場合、あなたがたの所に行くことを、多年、熱望していたので、――二四 その途中あなたがたに会い、まず幾分

もわたしの願いがあなたがたによって満たされたら、あなたがたに送られてそこへ行くことを、望んでいるのである。三五 しかし今の場合、聖徒たちに仕えるために、わたしはエルサレムに行こうとしている。三六 なぜなら、マケドニヤとアカヤとの人々は、エルサレムにおける聖徒の中の貧しい人々を援助することに賛成したからである。三七 たしかに、彼らは賛成した。しかし同時に、彼らはかの人々に負債がある。というのは、もし異邦人が彼らの霊の物にあずかったとすれば、肉の物をもつて彼らに仕えるのは、当然だからである。三八 そこでわたしは、この仕事を済ませて彼らにこの実を手渡した後、あなたがたの所をとつて、イスパニヤに行こうと思う。三九 そしてあなたがたの所に行く時には、キリストの満ちあふれる祝福をもつて行くことと、信じている。

四〇 兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストにより、かつ御霊の愛によって、あなたがたにお願ひする。どうか、共に力をつくして、わたしのために神に祈つてほしい。三すなわち、わたしがユダヤにおける不信の徒から救われ、そしてエルサレムに対するわたしの奉仕が聖徒たちに受けいられるものとなるように、三三 また、神の御旨により、喜びをもつてあなたがたの所に行き、共になぐさめ合うことができるように祈ってもらいたい。三三 どうか、平和の神があなたがた一同と共にいますように、アアメン。

第一六章

「ケンクレヤにある教会の執事、わたしたちの姉妹フィベを、あなたがたに紹介する。二どうか、聖徒たるにふさわしく、主にあって彼女を迎え、そして、彼女があなたがたにしてみたいことがあれば、何事でも、助けてあげてほしい。彼女は多くの人の援助者であり、またわたし自身の援助者でもあった。」

三キリスト・イエスにあるわたしの同労者プリスカとアクラとに、よろしく言っしてほしい。四彼らは、わたしのいのちを救うために、自分の首をさえ差し出してくれたのである。彼らに対しては、わたしだけではなく、異邦人のすべての教会も、感謝している。五また、彼らの家の教会にも、よろしく。わたしの愛するエパネットに、よろしく言っしてほしい。彼は、キリストにささげられたアジアの初穂である。六あなたがたのために一方ならず労苦したマリヤに、よろしく言っしてほしい。七わたしの同族であつて、わたしと一緒に投獄されたことのあるアンデロニコとユニアスとに、よろしく。彼らは使徒たちの間で評判がよく、かつ、わたしよりも先にキリストを信じた人々である。八主にあって愛するアムブリアトに、よろしく。九キリストにあるわたしたちの同労者ウルバノと、愛するスタキスとに、よろしく。一〇キリストにあって鍊達なアペレに、よろしく。アリストプロの家の人たちに、よろしく。二同族のヘロデオンに、よろしく。三ナルキノの家の、主にある人たちに、よろしく。四主に

あつて労苦しているツルバナとツルボサとに、よろしく。主にあって一方ならず労苦した愛するペルシスに、よろしく。三主にあって選ばれたルボスと、彼の母とに、よろしく。彼の母は、わたしの母でもある。四アスンクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよび彼らと一緒にいる兄弟たちに、よろしく。五ピロゴとユリヤとに、またネレオとその姉妹とに、オルンパに、また彼らと一緒にいるすべての聖徒たちに、よろしく言っしてほしい。六きよい接吻をもって、互にあいさつをかわしなさい。キリストのすべての教会から、あなたがたによろしく。

一七さて兄弟たちよ。あなたがたに勧告する。あなたがたが学んだ教にそむいて分裂を引き起し、つまずきを与える人々を警戒し、かつ彼らから遠ざかるがよい。一八なぜなら、こうした人々は、わたしたちの主キリストに仕えないで、自分の腹に仕え、そして甘言と美辞とをもつて、純朴な人々の心を欺く者どもだからである。一九あなたがたの従順は、すべての人々の耳に達しており、それをあなたがたのために喜んでゐる。しかし、わたしの願うところは、あなたがたが善にさどく、悪には、うとくあつてほしいことである。二〇平和の神は、サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。どうか、わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。

「三 わたしの同労者^{どうろうしや}テモテおよび同族^{どうぞく}のルキオ、ヤソン、ソシパテロから、あなたがたによろしく。三（この手紙^{てがみ}を筆記^{ひっき}したわたしテルテオも、主^{しゆ}にあつてあなたがたにあいさつの言葉^{ことば}をおくる。）三 わたしと全教会^{ぜんきやうかい}との家主^{やぬし}ガイオから、あなたがたによろしく。市の会計係^{かいけいけい}エラスと兄弟^{きやうだい}クワルトから、あなたがたによろしく。

「二 わたしたちの主^{しゆ}イエス・キリストの恵み^{めぐみ}が、あなたがた一同^{いっしやう}と共にあるように、アアメン。」

「三 わたしたちの主^{しゆ}イエス・キリストの恵み^{めぐみ}が、あなたがたによろしく。三（この手紙^{てがみ}を筆記^{ひっき}したわたしテルテオも、主^{しゆ}にあつてあなたがたにあいさつの言葉^{ことば}をおくる。）三 わたしと全教会^{ぜんきやうかい}との家主^{やぬし}ガイオから、あなたがたによろしく。市の会計係^{かいけいけい}エラスと兄弟^{きやうだい}クワルトから、あなたがたによろしく。

「二 わたしたちの主^{しゆ}イエス・キリストの恵み^{めぐみ}が、あなたがた一同^{いっしやう}と共にあるように、アアメン。」

「三 わたしたちの主^{しゆ}イエス・キリストの恵み^{めぐみ}が、あなたがたによろしく。三（この手紙^{てがみ}を筆記^{ひっき}したわたしテルテオも、主^{しゆ}にあつてあなたがたにあいさつの言葉^{ことば}をおくる。）三 わたしと全教会^{ぜんきやうかい}との家主^{やぬし}ガイオから、あなたがたによろしく。市の会計係^{かいけいけい}エラスと兄弟^{きやうだい}クワルトから、あなたがたによろしく。

「二 わたしたちの主^{しゆ}イエス・キリストの恵み^{めぐみ}が、あなたがた一同^{いっしやう}と共にあるように、アアメン。」

ローマ人への第一の手紙

第一章

「三 わたしたちの主^{しゆ}イエス・キリストの恵み^{めぐみ}が、あなたがた一同^{いっしやう}と共にあるように、アアメン。」

「二五二六 願^{ねが}わくは、わたしの福音^{ふくいん}とイエス・キリストの宣^{せん}教^{きやう}とにより、かつ、長き世^よ々にわたって、隠^{かく}されていたが、今^{いま}やあらわされ、預言^{よげん}の書^{しよ}をとおして、永遠^{えいぞう}の神^{かみ}の命令^{めいれい}に従^{したが}い、信仰^{しんこう}の従順^{じゆんぷん}に至^{いた}らせるために、もろもろの国人^{くにびと}に告^つげ知らされた奥義^{おくぎ}の啓示^{けいし}によって、あなたがたを力^{ちから}づけることのできるかた、ニセすなわち、唯一^{めいいつ}の知恵^{ちゑ}深^{ふか}き神^{かみ}に、イエス・キリストにより、栄光^{えいこう}が永遠^{えいぞう}より永遠^{えいぞう}にあるように、アアメン。」

「二五二六 願^{ねが}わくは、わたしの福音^{ふくいん}とイエス・キリストの宣^{せん}教^{きやう}とにより、かつ、長き世^よ々にわたって、隠^{かく}されていたが、今^{いま}やあらわされ、預言^{よげん}の書^{しよ}をとおして、永遠^{えいぞう}の神^{かみ}の命令^{めいれい}に従^{したが}い、信仰^{しんこう}の従順^{じゆんぷん}に至^{いた}らせるために、もろもろの国人^{くにびと}に告^つげ知らされた奥義^{おくぎ}の啓示^{けいし}によって、あなたがたを力^{ちから}づけることのできるかた、ニセすなわち、唯一^{めいいつ}の知恵^{ちゑ}深^{ふか}き神^{かみ}に、イエス・キリストにより、栄光^{えいこう}が永遠^{えいぞう}より永遠^{えいぞう}にあるように、アアメン。」

「二五二六 願^{ねが}わくは、わたしの福音^{ふくいん}とイエス・キリストの宣^{せん}教^{きやう}とにより、かつ、長き世^よ々にわたって、隠^{かく}されていたが、今^{いま}やあらわされ、預言^{よげん}の書^{しよ}をとおして、永遠^{えいぞう}の神^{かみ}の命令^{めいれい}に従^{したが}い、信仰^{しんこう}の従順^{じゆんぷん}に至^{いた}らせるために、もろもろの国人^{くにびと}に告^つげ知らされた奥義^{おくぎ}の啓示^{けいし}によって、あなたがたを力^{ちから}づけることのできるかた、ニセすなわち、唯一^{めいいつ}の知恵^{ちゑ}深^{ふか}き神^{かみ}に、イエス・キリストにより、栄光^{えいこう}が永遠^{えいぞう}より永遠^{えいぞう}にあるように、アアメン。」

「二五二六 願^{ねが}わくは、わたしの福音^{ふくいん}とイエス・キリストの宣^{せん}教^{きやう}とにより、かつ、長き世^よ々にわたって、隠^{かく}されていたが、今^{いま}やあらわされ、預言^{よげん}の書^{しよ}をとおして、永遠^{えいぞう}の神^{かみ}の命令^{めいれい}に従^{したが}い、信仰^{しんこう}の従順^{じゆんぷん}に至^{いた}らせるために、もろもろの国人^{くにびと}に告^つげ知らされた奥義^{おくぎ}の啓示^{けいし}によって、あなたがたを力^{ちから}づけることのできるかた、ニセすなわち、唯一^{めいいつ}の知恵^{ちゑ}深^{ふか}き神^{かみ}に、イエス・キリストにより、栄光^{えいこう}が永遠^{えいぞう}より永遠^{えいぞう}にあるように、アアメン。」

「二五二六 願^{ねが}わくは、わたしの福音^{ふくいん}とイエス・キリストの宣^{せん}教^{きやう}とにより、かつ、長き世^よ々にわたって、隠^{かく}されていたが、今^{いま}やあらわされ、預言^{よげん}の書^{しよ}をとおして、永遠^{えいぞう}の神^{かみ}の命令^{めいれい}に従^{したが}い、信仰^{しんこう}の従順^{じゆんぷん}に至^{いた}らせるために、もろもろの国人^{くにびと}に告^つげ知らされた奥義^{おくぎ}の啓示^{けいし}によって、あなたがたを力^{ちから}づけることのできるかた、ニセすなわち、唯一^{めいいつ}の知恵^{ちゑ}深^{ふか}き神^{かみ}に、イエス・キリストにより、栄光^{えいこう}が永遠^{えいぞう}より永遠^{えいぞう}にあるように、アアメン。」

「二五二六 願^{ねが}わくは、わたしの福音^{ふくいん}とイエス・キリストの宣^{せん}教^{きやう}とにより、かつ、長き世^よ々にわたって、隠^{かく}されていたが、今^{いま}やあらわされ、預言^{よげん}の書^{しよ}をとおして、永遠^{えいぞう}の神^{かみ}の命令^{めいれい}に従^{したが}い、信仰^{しんこう}の従順^{じゆんぷん}に至^{いた}らせるために、もろもろの国人^{くにびと}に告^つげ知らされた奥義^{おくぎ}の啓示^{けいし}によって、あなたがたを力^{ちから}づけることのできるかた、ニセすなわち、唯一^{めいいつ}の知恵^{ちゑ}深^{ふか}き神^{かみ}に、イエス・キリストにより、栄光^{えいこう}が永遠^{えいぞう}より永遠^{えいぞう}にあるように、アアメン。」